



燿霞日記

下

特 別
A10
4595
2*



門心 4
跡 1020
卷 2



煙霞日記卷下

十日日... 煙霞日記卷下... 飯村... 湖... 宋郭青山... 德勝寺...

144
門 へ 10
跡 4595
卷 2

下


浅井長政のゆかりの地をめぐりて大抵と云ゆ長政の像
かこの寺ありと我いまねむりあひふふ長谷村田村
高橋村下坂村きりきりすありとて米原より二里半
まで長谷なりとて我あけぬこの花いづき宿して
八幡文のちはるもまきまきすもこの宿をりて一里して
る根村とていづるふりて北國御成とていづる細原
入てゆきや桑の本の細かかきりこのあきりいづこをつ
くら里くおかきりやあね川といふ川橋をわたり八木村
りんとたえん弓削村高華寺ふりて山おゆや
ふふたきみゆきとていづる志津嶽とて中川

瀬平墓といふありとていづる人ゆいといふこの松の
一ひつありありとていづるあまいちいづる富田村といふいづき
りこの林の浮江といふ寺益田村といふをすきまあきり
村の入りて井も橋の一のきりてとて大きき石のきり
いづるこの村をてき長より二里半といふとていづる
まふらりといふとていづるきりていづるいづるこのむら乃
杉田源といふものおより船をりていづるいづるのきり
いづるいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる
かきまきりといふ船の便りといふとて新庄又崎また
りのあきひ錢石又といふ船いづるいづるいづるいづる

よそは、ちと切かへりいふものんとて江のつまひの
あまのこゝろをなめてまひれる物とこの間みすていふ
そ後の入を遊み、後、乃すゝ湖み、又このとら
よそゝ湖の物とてあつた、さうさつゝゝこのゝゝ
竹をそ^横又竹をわしてしまふ、縮をわすゝめは
りゝみやひらゝゝ水色とてなつゝわゝゝやゝゝ
いゝゝ

よそは、縮紫乃波とてまてまはひまふゝか
わゝゝりやゝこまゝつゝゝのりきゝゝんゝおゝやゝ
ろきふゝゝ、まのゝゝゝゝ日ゝらゝゝゝゝゝゝゝゝの

風もあゝふゝれゝゝゝ、船ゝりゝゝもせまゝゝゝゝゝ
船ゝゝゝ腰ゝらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
卯のゝゝゝ伊吹山み、辰巳のゝゝゝすゝゝゝ津久の午の
ゝゝゝ根柝崎、教寺山ゝゝゝゝ、未のゝゝゝおきめ崎
長命寺山ゝゝゝ大はゝゝゝ未ゝゝゝ申のゝゝゝゝゝゝ
いてゝゝゝ申のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
今はみゆ海はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
亥のゝゝゝ菅浦らゝゝゝの、卯のゝゝゝゝゝ申のゝゝゝ菅浦

の岬、長ちうして伊山との間をつらふ十八丁と云ふるを
 美繁集のうふをば昔苗と云ふと云ふる一は伊
 海はの名をきけい先経政ぬのこことおもひてと云ふ
 の作略いちひさくおきのたま、大まきこの崎、奥津嶋神社
 名神大 式、みくろ、伊社のあります崎ふれいさもあつらん
 蒲生郡 伊山もや、ちうくながもふすまきしづやといひまこみつ、
 ひいりしうきりゆのまのこことちうくながもよさうみちうく
 てふまきのもひまをなりく枕巻紙といふ酒とを
 くらうるもまどしくかかぬこの湖の四方へいふとつじ
 ぐうをふいし、 ながるぬと云ふつぢやまぬ人つぢやうつぢや

もさなりくみゆののちこのまのうちなむいさこの
 ちうきとらゆいしゆらうみゆの地まのふとつぢ伊勢
 の三子山うりしと云ふまをいひ、六のあつり、百二十ひうとら
 ちうきふこの湖のまち、鏡巻ふゆりといふいもとつぢのこと
 かなうこの崎に別慶もいひ、ちうきりこのあつりのまをい
 んとつぢとらふまをいひ、伊山ちうきり、崎めりするが
 ちうきりしとせん小崎といふをいひ、この別、ひつらの崎として
 岩山ちうき伊山との間六するまをいひ、この崎、湖の底より
 ちえぬきのふとせん、伊山崎にき崎ふれい、この崎のふとせん、あ
 つまきとむのこことし、三月のうら、ちうきまきの伊山

ノ嶋三水晶
拾叢林三三

とて浮連縄してつかきてその望む又その一の滝ときりり
ふとそとわらひいし古ねることよてあくそのあまーくわぬ
めめてさきこしお文やこの小嶋のうへに十段利権尻と
ふまきしてその洋殿の沖ふのうへにうらとねる清く
きいて大急る愛産ふりふをみ穴あり所ありこの穴乃
中ふぶ水晶おがしとや誓のふらふもあつこのあつうハ
の北おもてとて殿こころとてすて嶋のめつハ
水中うらとえつとて甚奇うらとていふ
うらつ草のおおふちとみとらあり銀言ふとふとみ
糸天候とふとらいいいし洲橋めつとらこの清のめつ

た、あつとら清のこころとて外にいつきも殿とていふ
うらとていふ後、崎とらあつとてすき糸天衣掛柳
とつと一むとら清山のうらと柳ハ一むとら山の
あまの葉いとおかた夕まるとつれる荒林の屏
風とて木本とらとつきとら屏ぬるハとて奇なり
木本とらとら横らこの清山とらとらとら横ら
これとらとらあやとてすてのふのふあつとら
まつとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
このあつとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

なほあまうくまのあまおひらうついひらぬさまを
めもわがうらねこのあまうらして大敷してあまさま
崎のさきうひら崎ことつし説のあまうらうらうらぬさま
て奇うらういんいあうらうらあまの崎といひて
平此の絶縁し船よりあまうらあまの波除くつてみ
ふかきつづきいひらうらうらまきと 稽古の間ともあて船と
とくわ岩角ともつふあまきといひて崎のわら崎乃
也一里といひといちう一先銀若巻をみ廻廊
きりて津本社まき川 津社のつくりさまいふあ
こいあ辰家の 桃山津殿をいひていひてあまうらうら
菊相の

舟繪ちとねのうらて金壁もいひて一先津前より
こまりてやとえつ 舟中津浦一舟とをわす浪巻は
なまきいすかうらとせう口つきまといふつゝまも時
はせていぬありこの津社のなまきお敷ありとあ津殿の
うとすうらうらとまきうらとあまのまのまのまのまの
うらうらとあまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
むし都良香まのまのまのまのまのまのまのまのまの
うとわてあまのまのまのまのまのまのまのまのまの
よてい崎のさまいひつらうらうら 十二周縁心裏空と

押さへしよりのこの崎のさまを... 又平家物語の
評政めし中世崎濱の崎ふまよりのこの崎のさまを...
いひつろくうら金輪際うらむいあるる水晶輪の山と云ふ
ことさうりき文句してねていおひい... 東京をみてつけ
ことさうりくく類の東京をみて... 例おかよ
るしれい... 糸籠の現しきむうう... おひいてらう... いも
とらう... そうなるなるま... い月いましてなる... いゆ
貝原の翁、山と、林本山下の石碓との... 崎よき...
やうよあさやうよ... い... 社も寺もみ... き... あり
氏家、一宮もふ... 社前よりわくのあ... 湖水渺茫や

して人衣とわく... 境況濛濛として人里となく俗塵
とくうれ、恰も、きよのかよいて、仙境へ入るやうよあやゆ
ま... すらすらとふる大地としてあやしき佳境こそあり
さまい... 河もおひい... と、法州也... う...
この崎の... まをよくの... こま漢文のかあまいしわきも
こ... 湖の... 湖を好むの癖あまは
この湖の、京いことさうこの女、野田大はあ... みるふ
ことさうふ... こい... ましてこの... るよあ... みるこ
世の、世と... たく... この崎みま... おれ...
この崎の、好... 人の、お... と... してお... れ...

おれいしよ平曲の師よりまよひちつきりあまわてさるうしそ
そのものさうよ船路いさひりおし文とやういふいふさく
ちりてこしはいこの崎と永保ちとまうてんんさうそやわ
ひうちる路いありろこの崎の湖とへそくあやすく
いゆさういふまうてまうて一人もすくふきをさういふか意
とけふふいすくせのえいし浅く文とやいんく湖中ふ
くろ奇境のあるこく一人のいさこく造化のさみま
いてまゆはみろくをゆるさせぬものうろく一たあも
しうさくわいふ心もうこしてあのこといなるくやすれ
まてさるとふんつきてよまんとすれあやよくは好京の眼

あよまうてんんさういふいふさくいひてしり
いしり
まやくまうこいしあひつりま契うけくまぬ
てうろくぬ
くこふありろものをさくしとさく崎のあまも
とま
十あまりさうつとまいさくしてさうのあをあら
さうみ
おませ一人のみやいつりま契うのる民色
の海つ

みまはるる世もみやいとふかすてぬち〜

あまやま
みまはるる世もみやいとふかすてぬち〜

都久夫須麻神社郡浅井とみ〜 浄社なること〜
竹のこといふ〜 竹はすへて浄ふ〜
なれる奇とす〜

永享二年六月廿一日源左京太夫持信奉寄進竹生鳥
御寶前と〜
よてもか〜 殊勝と〜
と〜 御寶前と〜

くわくむつらなりさるこの崎のあはれを此下の傍ふを
住職をゆゑすとていひおんこの坊の書院みまひとい

湖の眼下よみゆ

ちりあはれこひつ海の中よりてふきよきちの波
のわらなりさてもうらとらふすまきりやと慨慨あひり
よせすれはれめささる大湖のみまののみまきさすふ
んかきうぬまゆんさてこの書院の席よりるいふ世
僧上の詩とくはるるをわつしとわゆもくうりこの崎
この坊のかよ八坊ありてすへて九坊のみそ外よんふそ
るしとふとの坊の中尚付住さるるありとふ寺の志い

岩金山大神宮寺しふと志し付とらふなり船人のふ
やうぬあきいてれいやく船とてはるんもくしひまき
りふいせんときをぬんかいつれいあひり
てこきいつら湖のおもてうちまちゆらくありつ波は十
点の芒とひる之すくくゆくのさまおひききり
こよあきししし帆はくかよりたれい船は今かろうる
あきよおれ波くさかあきいさよこの崎のあはれ湖の
ふつきさうらとさるいおれをのりてくねて人の形跡を
ししうとつひもさるこふあきりうりゆらうる新よ
きつんとみやひんうちまらうせてんをおやませり湖

崎の氏子にて井ヶ崎の事を湯山いそとよまひふたれを
くづりのらぬいふ史つりなりしや西へ三十三河をく
ともかゝるおぢくふしれとてれをかへてこの崎をわら
さるうなるひびくとこの人の人々わらふさるりの流に
大和の主人が崎をわらるといむいひとをれをるこさくハ
虚説としふりこの村より江の志をさるりしりま
安さるを船人よひてこほひに田島松寺村とす
き及之久編よ小鏡このりをすき馬渡村とふ
いけい北へ御殿こいの小今カラクニ唐国スムラ砦村とふをすき川
をわらうて岩根村とすさるりしりなるとりしりなるとりしり

乃のふといりといへと及れやすくてなれくささるりちり
おれゆをなるとるよふとあひまきふおやまこおれなまはたれ
ぬ御殿のちう及らせらるりしりわさといたりいまはまとい
つりしりなるとりしりなるとりしりなるとりしりなるとりしり
うわまといふおつりか崎よせらるとりしりなるとりしり
とへはわりすむとよふ小ねな長い人ありてそのおのまは
ある人よお事しのしせあり人ちりよと人々の崎を別發
せし時せらるの崎とよまひ所とてなるとりしりなるとりしり
このをのこは候せしちりしり人のけことまはちり崎のゆき
しふる人せしり又一奇なり史やさて古渡ら

くくなりて日もくれぬる二十の月いとふなり及のこ
らの畑よままきいそきて農人のやぐえぬ

ふなきものもみ文細くきて月もさうやすらふの
出とひとこひひは浪の越後をさしとふものぬ
やうぬ所はぬきぬきやうらり夕暮すむよ縮
とらふとを供のよのこいひとらとこしとらとこいす
うふふひせしとこの縮は拾二里とてその誠前の
敷賀よりあるとてふねこのありとて満笑と味
し川笑と春の味とひてわりすむあうとらうら人も
ゆるものくらすらうらにうぬやとあうものみとて縮

ふるふふまにものういよむよひくの春あまにわり
ふくつててうらやしきはものものを潤してせうと
中へふふきうらや旅の宿とて湯屋のこふふと
かやのむつとまおのものうらうらうらうらうら
のいあらうらとこのぬいんつとらふやわとつ
一折のこいひあうらて

十二の朝とて鏡のまのうらうらとてこの春よ
ふ子清うれい矢火やうらうらのなひひてふ
かの法華とらうらとてふとありてそのあうつと
いふてけ里の春とらうらとて居城ありとらうらとて

そのあとやのちからとふくはきく、天守塔とみたりいさ
のころころいさふあきあきほく宿りといけりいざ
さむらきと水櫃とこころぬくうらみかたの船々のさま
いとゆりゆりさく散らうつら船のさまれをいんさふ
くさうらうしこのふきあうちとすおし下坂の船うらて

おきてこころももこころもみても志も坂むとすく
ふあさ明き辰村とふむうら二丁とらもゆきとらう
うらきよのぬきうてたて入て高溝村とふとすき
顔戸村とらうてたて日撫大砂神とふかくとらうらふ
のち居のかきさうらうてり伊社とらうらみ下とくま

せいまいてこのあうらみとむらりの氏津ふまかふと
こハ式とみく日撫津社^{辰田}とふし菘浦村とらう
碓井ふり居のちまうら新居村とふとすさ川をらう
て川といひてきのゆきり川の川といひてゆきて
系とゆいづる^ゆいづる^ゆ三里といふ葛坊宿といふ
この宿のうら伊吹ふもつてへきさふとて竜山といふ
この山ふ純津とまいて而垂といふもこころ
てあつ津とまの音の中とゆまれらうらまら
あゆみききといひて所の目らうらまらわさせと
まもの人ありとや大の宿の蓮華寺とらう下馬札

あらずして新よ似たりはつらうもよき寺に宗者ハ時宗とて
八葉山といふことハ本記ニ番場辻堂とみえり古記もて
北條仲時ハ主従の多く自害せし故にこの寺の過去
帳ハその時の事ふのしむるとちきり持保と一檢校
君も此後とてとみえりことありそのとさ能のこ
れらのみえり其の山ハ仲時の墓ありとさ中とのことハ乃
山ハ後者四百廿餘人の墓歴然とのしむ又ち波
瀬仲墓ル所とありこの人ハ帝の御つらふあらは
た自滅とてしりてさいりあらうき古跡ありねとく
まで昔のまふ古記のこころハつしきよ本平記の文

とせむいつきハさうはつとせむとせむと
今ハまの修羅のちせむもふみん甚のこころ
ふもせむと
身の時うらむとせむとせむとせむとハひのむとら
り人ハせむとせむとせむと仲時ハ八葉とありとせむと
てこの寺ハそのしむる寺ふんとせむとせむとせむと
つらていときらけしきせむといせむとせむとせむと
中りもみせむとせむと上番場とせむとせむとせむと
おみきとのせむとせむと杖とせむとせむとせむと
せむと楓樹山とせむとせむと一向宗のちとせむと

もみち松の色みてるはなをすうんむふうううう
わーうう小磨針葉とてふのわうて坂とてうう又も坂
とすうのわうて村ありこれ剣魔針峰と茶をある所
とつたはよとてあうううううてひまめと樹のみゆとま
境よきとんううう魂とてううううたのこの茶を
入てまの家のをううみわとすふんもま松もあうこれ文
え子のこのふいま崎とて湖よとてうう一坂ちうつ
くま松葉も又うううううううううううううううう
いてううううふみう山ふ山も子のこのふあきうううみゆ葉の
ううふ叶せ崎のみうううううう人えとてんやううあわめうう

みまに船路のまよとてうううううううううううう
わううううううううううううううううううううう
いううううう富石城とて崎とての崎とてううううう
やううう崎とてううううううううううううううう
まううううううううううううううううううううう
みゆ酒のこのふちうみゆう物え山とてい成のこのふちう
いてううう崎とてふむううう比良山とて西のこのふちう
あううあまうううううこのあううううううううう
いしまふまううううううこの山の景色ううううう
きうううううううううううううううううううう

とむの心さうりやまゝあひてはまゝさういひ
くめいふもさうりやまゝあひてはまゝさういひ
やとさういふあまの産地山まゝあひてはまゝさういひ
山ハ草玄つとく雲馬まゝあひてはまゝさういひ
すこきさういふあまの産地山まゝあひてはまゝさういひ
草の力をうてさういふあまの産地山まゝあひてはまゝさういひ
湖と好むの癖ハさういふあまの産地山まゝあひてはまゝさういひ
いひさういひ

針の山
いひさういひきをみせそあふさういひ
針の山

針の山
こゝまゝいひつ海みせあつみさういひ
針の山

妹、あま系あまの産地山まゝあひてはまゝさういひ
あまの産地山まゝあひてはまゝさういひ

あまの産地山まゝあひてはまゝさういひ
あまの産地山まゝあひてはまゝさういひ

あまの産地山まゝあひてはまゝさういひ
あまの産地山まゝあひてはまゝさういひ

あまの産地山まゝあひてはまゝさういひ
あまの産地山まゝあひてはまゝさういひ

ひしまゝ入、顔も臨湖堂、朝鮮人正と舟もふりかき
きんととらへり、外國人との京も感してつきりけむ
又たよりすう、坂道のわりてみま、茶室ありてきり
うまかまをうらなれとらあふ、横又、亭ふとこま
んりも、茶室、似つう、うら、又、心か、りて、足ゆわき、な
き、し、い、本、多、路、うら、うら、旅人、た、あ、な、れ、山、川、と、の、ま
め、あ、ま、さ、ら、う、この、所、も、と、り、り、て、うら、奇、縁、と、み、て、ん、と、
ら、う、す、う、又、け、山、の、一、奇、し、と、ま、あ、ら、う、の、お、話、し、
あ、く、ま、て、湖、京、み、あ、ら、う、又、一、く、ま、の、な、あ、れ、と、この、所
よ、す、む、ま、と、う、ら、ゆ、な、さ、さ、い、い、へ、船、夕、あ、ま、て、い、さ、づ、う、あ、も

お、も、ら、う、い、い、あ、ら、ん、の、お、話、あ、ら、う、せ、い、様、い、う、も、う、あ、ま
あ、ら、ん、と、と、き、や、う、う、つ、お、し、い、例、の、こ、こ、の、む、せ、う、し
り、り、り、の、所、あ、ま、い、う、と、て、も、ま、さ、み、へ、き、お、あ、ま、と、この、山、の
京、の、み、を、え、よ、の、り、ん、ル、す、う、う、く、う、ら、名、山、の、お、社
佛、刹、ふ、く、ま、あ、り、う、あ、ま、い、と、と、う、て、ま、う、の、り、
ん、も、あ、ら、ん、この、山、の、や、ま、ま、う、つ、の、所、あ、く、て、ふ、り、と、の、か
ら、ん、も、あ、ま、り、こ、り、り、て、ま、の、街、な、う、ま、ね、の、り、う、ん、へ
へ、う、ま、い、ま、憾、ま、お、か、ゆ、ま、ま、の、み、の、ま、き、憾、ら、い、この、山、
む、し、う、り、歌、の、お、り、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
和尚、行、到、磨、針、最、上、峰、一、湖、春、水、浸、天、容、撞、眸、稍、覺

よりたのしきお細り入てすうひうき及いて並ね
よりかきまほしくもゆきて大洞くまうつう湖の
ゆるうもすかちる根のうらなり井伊ゆけの城の
いさくくむいのみよみてりきりこの大洞くま
山のうへてき根は辨財天と云ふ名くけり門を入破を
のりか又大寶王と云ふ名のうらなるもあつふまより
二丁よりも破をのりて又山のありきとて入て辨財
天堂観音せりひそり奥院と云ふありてすてつうま
甚美麗しとて堂のうらなりみわすは湖く眼下
て長溪のありもみ湖の中なるたりまなきの時かとも

みの三上山もさうりへてくすう湖く味してん
しうもみゆきこの味のみわくふまのみにくく
くあつぬをさひうく人のきくことむく
からこの山のみら色くまわしてこまななう
のりきてみさくうなまか茶のやまにひてみ
ゆもろぬ

み紫まてあまのいさくくすいてみままゆきか
ゆる山く清涼寺くすま川門は祥壽山と云
新うりてん誠徳師の筆に堂の額かなひの筆
よて清涼寺とありなきのた名は南天蜀の木のつ

りくたうきうてうな等の浮像もさのみはきりし
から文すてのいもふく、その禪利りきて殊勝
るりよわもまへい湖ふまのこころさよらうし

ものひらふきききへうつういてきよくすしき
寺いしてらむる根の所へ入て又町をさうれ浜村とふを
すきは系村とふといつれは漸るしくりり一宮のみら
一里あまりもありこの系村より一町さうもゆきてた
ゆく、多賀大社とまりつる屋まで居るへのもあつと
ろよりその屋へ入て正法寺地田山小林村とふをすきて川
をわらふ川系とふを急て畑のこころとせかはいとあつし

どりくあつつくい麦のうめよなりけうといつるもあや
中河系村とふをすき多賀村とふの屋をへあつと
より三十丁といへ五十丁もあるへくおかゆとあつと
浮社はまうて御まへちとせみまふこの御社はわら
親らか人のわりあはねきとせとありてをさふき
ふりふくあつとみまふとまへてものこりもあつ
えて後ハやりきねとら御社と御事とあつと
てこころとみまふと御社と御事とあつと
あつとゆきとあつと二度まうとこころと
まうとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

ふみあひを言便ふふみあひふみあひと又もつてあふも乃ふ
久しきあふいふふふふふふふの名のふふふふふふ昔の
まふのふふふふふふ中ふふふふふふみふふふふふふ
も何のふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
のふふふふふふふふふふふふ伊勢の御遷宮の
ふふの神宝いふふふのふふと漢合の林ふふふふふふこの
名むふふふふふふふふふふふふ堂ふふふふ佛事ふふふ
ても漢合ふふふふふふふふふふふふ僧房ふふふふふふのあ
ふふふふふふふふふふふふふふ平尾村ふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふてたのふふの山乃

四里ヲ一説ニ五里
トイフ

うへふその寺みゆや、ゆきてたきさる川のせうふいつふを
中山なる愛知川の川上にあふりの山のふふふふふふつき
つきふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
茂助といふもの、家に入てものふふふふこの豆腐つくるふ
かといふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
てふものといふふふふふふふ味のふふふふのふふふふふふふ
ふふふふふふふふ旅中の美味いこれをふふふふふふふふこの
村、街なるね、茶屋ふふふふふふものもふふふふこの家ふふふ
ふふふふこの村をふふ坂野ふふ三里といふこのあふり
のふふふふふふ三里、四里ふふふふふふふふふふふふは里ふ



もふかたなりとふくまひの水源寺いくらふへいねて
よりここの杖づくむろしくすくせしはのなま
あひていとけきふきかきねあふぬきとく
うまひむすふら川のけりて川とまいてす
ゆけいこの山あひより又ひすち横さかたいて川
ありてその川とくくを亭橋とつひわたりあふいせ
おかく枝つらうきねもありて橋と連理ふまもみゆ
橋のうへより川上とのそわ川上の山もあふいおかく
このところとて塊をくはきおくのここのいさあはありす立
とまらるるふくのあてくらちきく橋上のお城ふ

足もくまはるもい

くふくわたりをむ山にもあさくけぬもみらぬ
乃色橋をわたりて坂をすくのりまはる根敷の盡
をたのふありこの武家とみて門の外もそとふ
すくゆら山門ありてこのあは大ききういものして志
らぬ境のこころんくく禁堂酒の石標もあつた
まのい大ききう石の手水鉢あり山門を入る本堂もま
つらいらのいものして志るも臺喜の瑞石山といふ
額のうらわの山寂室和尚の筆ことく鐘樓もこのま
へのうらわありこのなまより回廊つきして禪堂といふ

放参といふ款とくわたりこの回廊のうらうらと梅乃古木
一本もあっていきつくりくわたり瑞石とて昔光明と
もふらて奇瑞ありしをまつるる所とてこの禅堂
くわたりて回廊つき小開山堂ありてとくむ額を
大床とありて隠元禪師筆とて新治庚子菊月とあり
隠元禪師のこの寺の中興完山とあるしつうの人とて刻
後水尾帝の御いつくみとあるしつうの人ふまこの款
はうせらまむむもつう家風のしつうくまひさき
あらもつうくわたりて完山の像とくむく土像と
とていふくわたりて殊勝と右の梅町院盡元院東

福門院後櫻町院後水尾院後奈良院後土御門院
後桃園院の御位牌とくわたりておきありたつて將軍家
の御位牌ありこの堂より銅磬の巻いふくわたりて
みまの巻のうらうら文明十九年の多號と書してとくむせり
香櫃といふくわたりてこの堂の下に完山寂庵といふ
くわたりてくわたりてこの堂の巻を被風とくわたりてくわたりて
つくりとくわたりて半のあつて一本のあつてこの山のうら
よての名ふくわたりてくわたりてくわたりてくわたりて
ことくわたりて一本のあつてくわたりてくわたりてくわたりて
くわたりてこの堂のくわたりてくわたりてくわたりてくわたりて

て前住當山一線和尚大禪師よりより前住の塔
二軒を建てよまきふくみゆわこの墓つくりし時より
なむむとてはよものをさしあししてうくはさるふんとその
んちひいひいふくこの和尚のいさうりいわきつねふ
とみゆふとらあまいよきねうりてうとくむこの堂
のむむいのみ小經藏ありて毘盧寶藏とふ額のり
ふ南禪寺の英仲和尚の筆あつたこの僧は寺小
すみとみて前住かくりすへていつれもの堂檜皮ふき
とわふきとそ尾ささい山門斗るる大寺ふくふくふ
なりは殊務に耳流水とふをえとまより方丈の

座のいさひ泉水のちいさきありてあまのいさうりなる
くめうそ老松の一本あつたりここのうの山とあま
してありしうくつうさませれんもまきこの方丈と
わらふきこの老松の扉のうあらまきことりふか
わらふそ早あをうさねあまのうさひさけ松の下う
石のうさあしてみまこのあまのあむきとて北うり
ろの山飯高山とふ山とてこら飯堂とらんやうらぬ
松杉檜いともふくちひうりておぼふんくよあまのみ
うハ羊版より下すへておぼのみまてまはゆさはうりし
うりり眼下よみゆ川のれりうまおぼたけありその

かりすきく 城溪のついでに史半のついでにふたつ
とあり 一山僧のついでに山僧のついでに史半の
人の名をいふ 一この飯高のついでにありて竜門山とふ山
ありて 龍もあつることやとて又とありて山と雷溪と
らふつてもあまのついでにすまひもよまことなる山と
て 龍もあつことやとて 川とてとてあまのついでに
みゆの山とあまのついでに 峰といつてあり この山は
あまのついでに山とてあまのついでに ありて 城溪と
は 城とてあまのついでに ありて 城とてあまのついでに
中とてあまのついでに ありて 城とてあまのついでに
くほいふふみりりといふことなる山とてあまのついでに

この世の茶を三人の旅人ありて 楮松折くへて 竹の節
ありていひひり 君はあまのついでに 史半のついでに
よわきもさして 史半のついでに 史半のついでに
歌人を 刈村田安是 門人ありて 史半のついでに
うちを つわり 松坂人ありて 史半のついでに
の寺とあまのついでに 史半のついでに 史半のついでに
あまのついでに 史半のついでに 史半のついでに
ひらののさきといふ 史半のついでに 史半のついでに
を 史半のついでに 史半のついでに 史半のついでに
癖わきといふ 史半のついでに 史半のついでに 史半のついでに
城溪が

ら先とひりくはいりもさなりとひりくこいもむむのあり
しきくへい同くもあふいとゆきすしきいひり
くて目式百目とすいぬ價は百目を金走歩と絶和
ふふかつきくもあふいと此茶のこく上田餘斎、清風
損言と志りて味をほめささいわきくわて湯をのあひ
あまよえくこくんとあひくもたやすくはるるあり
こひりまりけりその人わきくはう治の茶とすいひて大のあり
りそ製する茶の類のありを凡のこくもえんけい
あふくへいこくもあふこはくそ又りの後水尾帝の伊歌
よみて一線和為とあふくもあふく伊祝人もあふくを凡

傍くとくは宝物とありて伊歌の伊宸翰はうんものこあ
け硯はりくあり符絵りてささいおくつて昔小刀までもそ
へりくも十その伊製もあふくへいそはなくもあふくを
此寺の昔寂室を和尙の宗基せりてし何この寺の守
佐と本雷江宗永とふ人雷溪と奥嶋と吾州山水の眉
目なまこいつまことともいひりてさうの和尙この寺をこ
のままてすふいちこの山を宗基せりてさうの時、康安えんこ
永源寺の名は宗永の永の字とその氏の源の字をとらまこ
るるも山号は中飯高山といひりてさうの瑞石の奇端あ
りりり瑞石山とあふくもあふくこくもこくらのよりく

寂室和尚の法録の末に於て一系の和尚の傳り
寂室和尚の法録の中と誅
却江州飯高山下越溪之上とあるは今ち川と云ふま
多く紙溪と川と云ふはふん飯山の飯山の飯山と云ふ
らよ似たりと云ふは上もいり雷溪と云ふ存ありと云ふ
その法録の中にもわたりと云ふは今ちの月と云ふ
堂塔も表徴と云ふ一系和尚、再興せしむるこの和
尚、則久我殿の御子として圓鑑国師の法嗣儒ハ又
三宅七羊と云ふは吾ハ鳥丸殿光廣卿の御門人少く
よの爲めぬる傳るこそ今もいへんらんおとといふれ

ハハ久我家の道元禪師といひ一系和尚といひうらる僧の
ふりまされいてはらんもより一系和尚の後水尾帝の
ふく御信仰まして創佛頂尊妙の謚號ありあり
六の和尚のこの山としてつらと云ふ詩とて帝の御之し
あといひ御製十首ありてこの御集と云ふより上り
十その御製といふはこの法録とてそのいふはひいて
いふと云ふはこゝろまゝその韻をつきてふのさまと十その
うらるるなり

みらひもふき古寺の村おぼ一イッテク多ふく文やま
志つらり

おみらのみひらうきよのきこ解てまじいのゆえを
醒しり山寺

志つらぬるうきよのきこさや山みゆとらうき
ひん

山寺のきこひらうきよのきこあひあひ
むきこ来ぬ

おみちゆきあひあひうきよのきこあひあひ
か門

飯高の山あへてのむきおみち松杉さうき
あをきいろ

よてみこひらうきのきこあひあひうきよのきこあひあひ
あの声

おみちゆきあひあひうきよのきこあひあひ
のしりも

おみちゆきあひあひうきよのきこあひあひ
おみちゆきあひあひ

おみちゆきあひあひうきよのきこあひあひ
おみちゆきあひあひ

おみちゆきあひあひうきよのきこあひあひ
おみちゆきあひあひ

おみちゆきあひあひうきよのきこあひあひ
おみちゆきあひあひ

おみちゆきあひあひうきよのきこあひあひ
おみちゆきあひあひ

おみちゆきあひあひうきよのきこあひあひ
おみちゆきあひあひ

寛永癸未の秋輦下惣成魔子宮憲瞻瑞石古禪叢雖然
新負任持印難使他趨頼落風拌捨世縁俱守志揣摩已
事別論切溪山温籍如經眼疑是前身隱此中つらねり
又かゝ和尚の所望の詩、高楓映徹夕陽天染得松林
凡外煙可惜無人挑法戟紅旗閃爍寺門前つらねり
ちも御いひつゝふさまひげ山の所望ふもくもりあり
さてこの寺の山と山の間は河をたへていへん又高橋の
わづらひを先んをわづらひもんよくきとらぬさまこゝ
てこの寺のむらひはゆんよすこいおざ村へつむむとそ
こりのりき又よとまきとしもよのなをりのまの橋乃

わづらひを先んをわづらひもんよくきとらぬさまこゝ
てこの寺のむらひはゆんよすこいおざ村へつむむとそ
こりのりき又よとまきとしもよのなをりのまの橋乃
わづらひを先んをわづらひもんよくきとらぬさまこゝ
てこの寺のむらひはゆんよすこいおざ村へつむむとそ
こりのりき又よとまきとしもよのなをりのまの橋乃
わづらひを先んをわづらひもんよくきとらぬさまこゝ
てこの寺のむらひはゆんよすこいおざ村へつむむとそ
こりのりき又よとまきとしもよのなをりのまの橋乃
わづらひを先んをわづらひもんよくきとらぬさまこゝ
てこの寺のむらひはゆんよすこいおざ村へつむむとそ
こりのりき又よとまきとしもよのなをりのまの橋乃

いひら文と亭橋のあつと、こよめまのあふ、
松捨のくろくめすとき中々あままりよまし、
ろある、おぼのみむ、
あふ、あふのま、い、
かやくこま、十月の月、
丁念ものまひ、
くれ、
経蔵の如意宝珠、
さまえ、

ま、一、
あふ、
も、
う、
一、
て、
な、
こ、
あ、
く、

人とりまきと佐のをのこみ人こりちりちりきとわりの
くりてりいさふむりりみるそ人讀みるあさり
音とやいさむさあささささ維通るのみちちうもさうり
さまそて芳地をまもくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
文景汁 筆をふけうつてんいけんくくくくくくくくく
くくく文車とくくくくの吟人あさき雅景をといさなる
えせ歌又もつねいてくくくくくくくくくくくくくく
おん其のまきくくくくくくくくくくくくくくくくくく
みら

言世ふゆのいりく昔くくくくくくくくくくくく
みら

さゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
急

末かき源くくくくく寺うくくくくくくくくくくくく
谷川

いひらぬいひらぬの村お地との地いりあさき
くくく

名唐くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
溪川

谷川の麓ういてる麓あふぬほまきつるの山乃
もみち紫

ささきものいひうきやいふつちの谷ましまさくともむ
ふあきき

麓のつらしてわねともみち紫の名もふまきてあま
すゆき

もみち紫いこうとせきとむきり春のいさかとりくる谷
川のち

ささきものいひうきやいふつちの谷ましまさくともむ
もみち紫

ふむはうものさなふなり先よて免のふとわふ谷川
乃り

せまりあー山のといふうちひくみかふとまきふ山の
もみち紫

いづれうまよむるくすうてーもみちのまきり
来てみる

宿もぬ山寺つらーもみち紫の錦のふとねつら
よしてささきもの茶をよくりてすういひもあな
をやうりて及のちまきいづれもあうたわき板と
わうりて山上村よりよつらうの茶をより五六丁もあつし

この板川の川にさかすかといふと愛智川の川上
をいさきうら大川ふきとふらすふのあつらひと
あつらひの山上村に綿掛村の陣をあらして所
あはせていさき村に川の橋掛とふこのあつらの
よて一万にふらりてこの村の扇をいさきとふら
り中ふは家屋いさきのいさきこの村に伊智の四日市宿
より八幡とふとこえてと江のふといつる街
のぬかや境の及ふの街なるはつらとふらありこ
より八幡へ六里土山へ六里日地へ三里伊智の田光へ七里
四日市へ十里とふらてふ地村に二村よりきてつらこの村

中ふ小寺ありて永源寺の末寺といふその寺の老
つはふとありておぼありふはふの山にやいんとの
つはすふのたふありふきふらふまして一山の
すきりねく色あひも地よこらふいぬあふい
海にふあへくおぼれあはき甚貴の意ありつら
人の倒のふあふきあふらふらふらふらふら
おぼふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ありあふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
この月九のまふらふらふらふらふらふらふら

くふあすをまうりし里人いひかゝる人のこゝろをひねり
考へし考根人もかゝりやうよやうぬらふおぼふり
考ことて経冊ようきてわきよみせふいかりよみやひ
や、形ぬらふあうりといふのちよぢいあうりあうり
もせ文してわきもくふのあうりきてみせふいさきのうら
をわきせしとせなり三人の名いふ地附輔土樹上田逸孝
正方山口は友之とふ人もうりこよひ月やふやあまに
まゝもふのあまみまゆくてもうの考根人そのうら
いよまうりしていさうりよまうりよまうり亭の櫓のうり
ようりよあまき梢よりすきとわりて谷川よりはる月の

さまものつうとあまきさうりしとわうり又柳もともわ
りてうらみあうりともよみよゆふいさうりよまゆねと山さま
あまきさうりよあまき織漢ようりよままいいんさうけ
まはうのかうりうり川原をさうりわりて断崖のうり
うりて月をみるよまうりよまうりいんさうり
おまひきやあまひわうぬこよひうけうけのおまひ月よ
なうえり
はふりやあまふみこよひうけうけもかくも文月いさ
おまひより

故々よ友とあまきうり月をさうりついでいさかひてみまも

みらら那ま

いりある君よいきて月み交をもみちとふのふ
さよせせうとみて若根人よわへぬまはるこふお
むきゆりさてこの三人の若人のうち土樹とふい
宗通らふおむきまをな居風の流をむむい似けふい
みやゆらる人よそのものうらまおのうらまおのうらま
つまゆまをこのめおむきまをな居方とふ人のこの人
のうらまをいきていきていきていきていきていきていきて
根根よむらう宿とふて後らふのつまゆまをいきていきて
さまのものをうらす前らう川のちうらまをいきていきていきて

あり茶を煮る味いとうらまのむらりていふやい
たふ糸床かまの供のものをむらう宿とふらう
いこゆねまをいきていきていきていきていきていきていきて
味まをかくして若人の歌よとふまのうらまをいきていきて
うの人うらいつまの時の若人のうらまをいきていきていきて
ふらういつまをいきていきていきていきていきていきていきて
時若うはちまを海山とわうせとふらうつまをいきていきて
みつらうらうとほえまをいきていきていきていきていきていきて
志らひいぬまのものをいきていきていきていきていきていきて
めつらまのうらまをいきていきていきていきていきていきていきて

時好は、かくもてふやうにわきのおふよーいひろくむらさき
こゝろへんあつたおむきまも多をうちてゝの人お居の懐をく
みぬゝもやとちぢゝゝゝ先におひのおぢふみゝゝ
お居凡ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ものゝろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
是々おせまほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝ昔の八十の漢の古はよてみわゝ甚りゝゝゝゝゝゝゝ
砥村ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
りいつる月を湖上を船うめてみるさまじゝゝゝゝゝゝゝ
衣おひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝらあゝゝゝゝの八坂のあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
暖國におゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
此方おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

みゝゝゝのゝゝゝの 錦かゝをやふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ

とふ寺ありこもば寺の末寺にて昔ハ大地よりこもり又
すこしゆえての竜門の滝よりふこいかにき流してつき
けき定むをついぬかさまひらのなるめり下ハ越溪
みりともてつるま麓いりさまいさきよく又むいの岸は凡
高よりふりあつてもこのあつりよりみゆあつりよハ見えみり
名のみこくこをいすく流のついでとよま一とい
あつりこのあつりハ越溪のちのちいといさぶくはゆきと
よりハの板橋のあつりまてハらの名ゆえすいハ静まりこハ
しききといひて尾山ハあつて針らなることい
いハつらんたのゆてよお紫のちいさきみゆきハ紫丸を

よいハせふハこもりちりうてたよるんてあつりハ
すきハかふくす丁あまりのりき山流とへりの退
耕菴よりハ菅のつ柱ハふきてりりそめの庵こハ
このふ方丈の座よりえかこせハ茶園ハ茶の本はまかく
うあつりこの丁ハ花さつりそふいハいハ実のひまもかく
本ハつりこはきてるをりハ座まらんて袂ハひらひ入れ
先座ハ入るよ四畳の間のあつて佛壇あつて花さるハ
観世もかさつりいハいハあつてつらハ花さるハ
も山流ハひらりこもりて流ハあつハ創この水源も
の茶のちきつらよそきのふハ茶もこもりハ

たりとてこの茶このところよちすしてかようつせりおと又味
 せんすとしてふかしくおしいことよみやひること又厨の
 へよ入てみまの焙炒四をかけりこれ茶を製する所乃
 まうらるりともかけひのちもいときうかりてこの茶おと傳
 らるおとよものあきすまひなり店のおいもよらわら
 地炒る指地うらもよふらせとられらる店のみしらし
 もいしうちこもしりとてこの店へあふらこのところのあ
 よて茶を蒸さるこもららららとてをきてとていし
 来らるなまの店もよこもんとすまの老僕ういしり店を
 庵まの今うらの山の麓せんうを所理とゆも

くりいさよひきらんていてゆもらやそとてらあ
 り僧よあぬの者の若人らうんもけいしてゆ急
 し〜ぬりこりおひき茶をい〜とてららよ蒸てい
 すとららよおし〜のみ〜む〜味を茶もあよはきん
 瓶益のい〜ふつ〜ぬもあ〜ら〜わを調度〜一ふ
 よ〜ららららま〜と〜新らる棹よらららら何材を
 つ〜せらも果情〜
 とい〜こ〜ま〜えものせ交うて門をい〜す〜坂を
 やせる店ら〜より一里〜りお〜よかやとの流〜みよ
 とい〜と〜こ〜ま〜えものせ交うて門をい〜す〜坂を

くつろとろろろお世とみるさま又おりりこい山の風景
と横らりのさむさまをすてのお世ふいあまえくふ
堂のついでいさうを流し常しをといへらんやう
いとおろろ言とめらけこのあうりよも作せゆり
断當ちかき一ちのふふいさのまのいさうい
このあうりもあまをいさういさういさういさうい
かすくくろりしめてお堂のまをすくろり日世の人こ
とて女のみ人さうお世みさうおあへりまのふふ人
あへらりおままと世まへんあへりし心の幽遠おれ
ひやまへしりの亭の橋のわたりよてまういさういさうい

は山のかうりさくくじさうしもねをくく吹いて神の上
よちりくおお世のま川よさう山のあまの蝶のひらり
ことくやういさういさういさういさういさうい
あうりさういさういさういさういさういさうい
ならりあ
このまふみすてんこのまういさういさういさうい
もみちあ
むつまういさういさういさういさういさうい
さういさういさういさういさういさういさうい

の充満なり故人の歎あると云ふ名所なりと云ふあり
りいさほりよきせむらうと云ふものいふはさうもあま
り此の名所の舟と云ふは山のことなりと云ふ
宿よりそひつひくいて今といふ御産根の人か
わらきと云ふしむらうと云ふはさうと云ふなり
みすていこい此の山の色いふはさうと云ふはさう
のわらきと云ふ

ゆくこのこといふはさうと云ふはさうと云ふの
わりきと云ふはさうと云ふはさうと云ふはさうと云ふは
この里よりやと云ふはさうと云ふはさうと云ふは

わすふよあふみと云ふはさうと云ふはさうと云ふは
おのれこのこといふはさうと云ふはさうと云ふは
飲もさうと云ふはさうと云ふはさうと云ふはさうと云ふは
二のやと云ふはさうと云ふはさうと云ふはさうと云ふは
そのんといふはさうと云ふはさうと云ふはさうと云ふは
をさうと云ふはさうと云ふはさうと云ふはさうと云ふは
山と云ふはさうと云ふはさうと云ふはさうと云ふは
と云ふはさうと云ふはさうと云ふはさうと云ふは
りこのあつりの里人あますまこの山と云ふはさうと云ふは
いよいつるさうと云ふはさうと云ふはさうと云ふは

いへとこまはり居たりしてありては、昔の人
のみをみて、実とくふいね僻論とのみふ人もこの多きいさ
へきりあり

十五日てまきりし、朝しつとくさかたいふくしてさむ
さことけしむかふかいうる時よりしよは、清いしとくみ
りしうくして、湖もくくみゆ、比校のふと山さく
みゆりあり

いへの山みみのゆもくちうくし、めよりふよほの
海つら、湖しつて、ちひさき山のこまみゆり、ハハ
幡の山しとく鈴鹿山もみ、あふり、ハハ、すむ、山の山さく

やうてのれん、こまきして、まつふつ、く、おひゆり、おま
容情より一瀬村とふとすき、んど川とふとわら、こま
松尾川の川下も、この川をわき、あつとく、ふ小村ありて
けふく、土山の宿、い川、及、いろなき、おのあ、らん、じ
こま、ふりの、おまき、鏡、若、ふ、名の、志、し、ち、て、う、ら、り
飯高山永源寺とあり、この、多賀街、及、り、ふ、こ、ま
よ、く、人の、ま、ら、る、れ、永源寺、ゆ、り、こ、ま、ふ、こ、ま、あ、る
人、す、く、ふ、く、る、標、い、つ、く、く、る、この、宿、ま、か、い、掛、り、二、里、し
この、宿、中、の、こ、ま、氏、林、の、所、社、あり、て、る、居、り、額、を、う、る
よ、正、一、位、午、頭、天、王、と、あり、午、辰、と、ま、ま、正、一、位、と、あり、よ、ま、め

もみぢ紫蟹坂とこえ松鼻とよ山とよとよき女史坂や
りよ坂あり

女史坂ふこの層とてとちこちとちかひとちかひ
ふむむ山ハ坂もおかりきかかる麓のりふふとよと
そのこいこいゆるをのこいこいゆるのこいこいゆる中
よせおききもの酒色博奕のこふきやわれ酒博
の二をおきて色かかるとこふきとんかかると中よき
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
色いさこの鉄とてらんまうせぬとあまいおききとあり
情博の二いさこの鉄とてらんまうせぬとあまいおききとあり

身はくりにておききかかるとこふきとんかかると中よき
やまひとくわつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
いさかとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
あまいとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
いさかとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
いさかとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
まてわつか味とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
近江伊豫の玉塚の標示とつとつとつとつとつとつとつとつ
今家一羽あり藤物語よひき地のさまあつときとつ
いさかの所のさまのいさかとつとつとつとつとつとつとつとつ

らんうて せふよさいりあぬ人の名のよまよくゆゆも
さしあ人の名のよまよのきりあいさめこのい
ぶりの得失を早見はかやせあふふりおんり
つらきあきこもふまのりすのくせさる坂を
くさり 鈴麻押社とみ坂下石もちくさるあつ
たのさ小岩を鉄もりふりありこもこれあそよの
みすくくはは丁も入てまてみりいと大きき絶
壁のものとくちてその中よ志の鉄もねよふ二廻
とあをせりあふりよかとき流かちて甚難地なり
いさくらちありじすらん流のちあるの浮島の東よ

よそへてすまよ山流み葉もこれきみゆきとささりよ
おもふあふりいやくさきさて時よりあふりいよ
くあそよてそののまぬあふりいりうとあふり
あふりいりいり坂下石とすき昔捨山のやふりよ
あふりいふあふりあふりてききり
これあふりいりいりあふりいりあふりいりあふり
捨乃山関楠原椽木の三石とすきゆきまよ 飛山の
よわたりいりあふりいりよ
わきまらるるのちまよまよまよいりあふりいりあふり
あふりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

やうりぬこの家々、まじりたりとナにたりと、おがきしとて一
ちる娘もらう、あつととらう、紅きふく、さうらう、よん、まき、う
かてせうらう、タム、すり、う、いとむつ、し、き、神、茶、も、い、さ、う、
味、ひ、を、ま、せ、り、

や、ふ、ま、の、宿、の、名、の、み、お、あ、ひ、し、よ、も、の、み、む、そ、二、あ、の、
ち、う、ら、ふ、の、な、ま、い、ひ、く、し、ひ、る、み、も、て、め、つ、し、ら、う、な、れ
い、く、り、く、あ、ら、む、し、も、も、の、う、く、て、ま、ゆ、ま、り、こ、あ、ま、ま、み、ち、り、り
も、あ、ら、む、そ、ち、い、し、

十六、り、ま、ま、り、宿、り、を、い、て、か、あ、く、は、い、ら、う、ぬ、け、ふ、ち
家、さ、う、へ、ら、ん、の、の、り、く、て、ま、も、ま、み、ら、し、り、は、し、湖、山

の、さ、ま、よ、く、ら、へ、て、い、し、の、さ、ま、い、ら、む、お、れ、く、り、お、れ、に、も、ま、り、
さ、ら、る、ま、は、よ、あ、ぬ、ふ、せ、き、い、な、ら、う、ま、ゆ、ま、い、ら、う、く、
い、あ、ら、ん、人、の、い、し、う、あ、や、ふ、き、ま、の、い、ら、う、く、て、未、の、
刻、す、く、ま、は、い、お、れ、い、く、つ、き、ぬ、う、の、ま、ゆ、ま、い、ら、う、く、
し、お、れ、の、あ、よ、ま、と、い、ん、う、あ、い、ま、を、く、ら、う、て、

今、う、り、い、い、さ、この、紅、ゆ、ふ、ん、も、や、ま、む、ま、ゆ、の、い、ま、と、あ、ら、
け、い、く、お、れ、え、あ、い、ら、う、め、ま、ま、さ、す、ふ、座、の、お、れ、の、さ、ま、い、
い、ら、う、く、ま、の、さ、ま、と、う、く、い、ま、い、ま、き、お、れ、い、ら、う、よ、い、の、ま、の、ま、ま、
も、ま、い、く、ま、い、ら、う、く、い、ま、い、ま、い、ら、う、く、い、ま、い、ら、う、く、
お、と、り、せ、い、ち、う、も、す、く、ま、い、ら、う、く、い、ま、い、ら、う、く、い、ま、い、ら、う、く、

しるべき事やあつじうれいこのあつりのおぼれはふふふふふ
りかもしらていむおそくすー又か核衣おぼしんをりも
そのんすんきこいおぼしめいひいもつゝ十日あまりの
旅路おぼし路のわさすよんかきかかきーといきこふ
つゝもなうてりうつきふふこいふこはふふふふふ
そまりの荒年はまゝ人の志をうらもしてこの秋の
考鏡をゆてふおぼくおぼしこいふふとさすう風流
の旅いこも人もおかうもそのもりりもおぼし新地の
佳境をみわたりーいこらおそりきこらちのせはてふれ
しこいんさるーもまよりわきいふおの人のゆさる

とらをみろそとこのむめくせうきこいひのせー新
の中よいんひろいものせぬあつりもいひもわきま
ひーきいひのえいゆーいもあらんうーいこい
らきいん里敷をむねいそそのいりて宿りの
妙下よていひの日記をまきつゝりりり
二巻とさうぬきを記りそのむいわつたふまきと旅いづ
とんすまうせぬ身うりせいこのいもいこいむ又む
んふくはうきつらんもいこいーこいこいこいこい
身い身ぬい記りのこいこいこいこいこいこいこい
るものいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

すきひいのかくくとのこ又ハ里人さくくくくしとそあまう
えうして後筆とくはつねハあやまりハおふくハたは深き
とくくくくあつらふハの痼疾ありとあつらふハくくくく
ハつらくくハ流の道志多ハとあらんくくくくくく
けし

天保ハ多とくくくくハ神受くく

小津久足

煙霞日記卷下終

題煙霞日記後

曾經勢北到湖東小雨輕寒十月風山路穿紅葉去
就中心醉越溪楓

霜帆熨眼夕陽隈彩筆知他奪錦也記得水源精舍路
宛梁紅葉一枝來

国字丁寧記土風俚談率與句愈工詞林不肯留餘地
每教湖山指掌中

既題煙霞日記枝痒難禁再賦小詩三首
永源風景思無窮昨夜秋窓入夢中直過板橋臨谷口
楓崖霞斷萬梢紅

林間月影遠隨身
惜兮空山靜處真
爲是楓林紅似錦
霄行尚勝昼遊人
古語衣錦昼遊反用歌意
唐詩共言晨有日便是昼遊歸
聞道山中不忍歸
楓林處處紅霞接
無情更有有情來
却愛西風吹落葉

戊戌初秋

夢亭東聚

